



## せせらぎ物語 運動の前史 その2

田辺勝義（旧江川の水と緑を考える会事務局長）

50年代に植えられた桜並木は地域の誇りになっていましたが、高度成長の下で、矢上川流域の樹林地や農地は次々と宅地などになって行きました。そして、それらが持っていた保水機能が失われたので、少しの雨でも川が氾濫するようになりました。70年代には、台風でも来ようものなら床上浸水が必ず起こる程になり、矢上川は“暴れ川”との異名を取るまでなっていました。

そこで、桜並木を伐採し、ボックス型の川にして流量を増やすという提起が市よりなされました。当然のことながら、「桜並木は残せ」、或は「山側だけでも残せないか」という運動が起りましたが、町会などが動くに至らず、この地域の誇りであった桜並木を消え失せました。しかし、ノスタルジーとしては強く残りました。特に、自ら桜を植えた者は特に。

ボックス型の川は水に親しめないばかりか、一つは、それでも台風直撃などの時には洪水になったこと、もう一つは、普段は水量が少なく、下水道が完全でなかった矢上川、江川は悪臭を放つどぶ川になり、むしろ地域の鼻つまみもの状態に変わり果てて行きました。

そこで市が打ち出したのが、巨大な雨水貯留管を川の下部に埋設して、水量を吸収させ、洪水を防ぐという対策でした。そして、上部には高度処理をしたきれいな水を流す計画でした。

いよいよ次回から、親水緑道づくりの本史の始まりです。